

二千二百円の時計くんとのお会い

熱帯雨林

「な、なんだって……」

冬のある日、明け方頃。家から徒歩五時間と三十一分の駅にある売店の一角で、僕は思わず眉根を寄せた。

事の発端は、些細なようで実は重大な、とある事件であった。今日は火曜。すなわち重い足取りながらも大学へと出向き、いつも通り勉学に勤しむことになるだろう平日である。ちなみにこの「重い足取り」というのは、本当はサボりたいとか、寝ていたいとか、あるいは小学生時代からコレクションしてきた歴代の定規くんたちによる、「タワー・オブ・ジョウギ（全長四メートル）」を講義中に構築して悦に入りたいとか、そんな怠惰な理由から来る表現ではない。大学生という、社会に貢献し得るだけの器量を養わなければならぬ立場にある僕には、学業を疎かにする勇氣などまずあるはずがなく、ましてや授業が本来ある時間に何か別のことをするなどもつてのほかなのである。現に僕は、去年の四月に進学を果たしてからというもの、勉強に精を

出す生活を日々繰り返してきた。通学中も夜の就寝前も、とにかく勉強、勉強。その結果、学内でも悪くない成績を維持することに成功している。僕の通う大学は、世間のみなさんでいうところの「いい大学」なのではないかと思う。この先、周囲から抱かれる期待も大きいかもしれない。

だからこそ、今回の事件はかなりの痛手であった。どういふことかという、一限目がテストであるにも関わらず、時計を忘れてしまったのだ。

普段なら別に気に病むような事態でもないであろう。確かに大学の講義室には時計がないけれど、時間などスマートフォンがあれば容易に確認できる。しかし今回は話が別。仮にテスト中にスマホを覗けば「カンニングじゃないんです！ ただスマホくんの電子回路に見惚れてただけなんです！」と先生に弁明しなければならなくなるし、第一そんなことをしても無駄だろうし。

ああ、もう。せめてもう少しだけ早起きして、あと一本前の電車に乗ることができていれば。乗り換えのために降ったこの駅は、前述の通り家から徒歩五時間と三十一分の場所であり、それはつまりとつても遠いということである。一限の開始が八時四十分であるのに対し、僕の取ったルー

トで向こうの駅に着くのは七時五十分。そこからバスも利用することを考えると……うん、今から時計を取りに帰っていては確実に遅刻してしまう。——言い忘れていたが、僕は県外の大学に、片道二時間ほどかけて実家から電車通学をしている。今日のように一限から講義がある場合、遅くとも朝の五時頃には起床してはならない。先程の「重い足取り」のワケはここにある。

さて、どうしたものか。いつかの期待に応えられる存在になるためには、こんなありふれた定期テストでつまずいてなどいられない。それに僕は、親のためにもテストで良い点をとり続けなければならない。

なお、これは親の束縛が強くて大変だとか、決してそういう話ではない。現在利用している奨学金の制度が成績優秀者を対象としており、家計のためにも成績を落とす訳にはいかないのである。親が金銭的に楽できるような尽力することは、こうして学校に「行かせてもらっている」側の義務ともいえるはずだ。

そんなわけで、僕は考えた。予定通りテストを受け、かつ問題のない点数が取れる方法を。そしてその結果——。

「……にせん、にひやくえん？」

口をあぐりと開けながら、まるでお経のような日本語を無様に放つ羽目となった。売店に入り、奥の「電気小物コーナー」で奇跡的に発見した腕時計が、二千二百円という破格の値段だったからである。

こやつと最初に出会った時は、いわゆる「天が味方した」という文言を天井へと解き放ちそうになった。僕は神様の存在をどちらかという信じていないし、つい先日日本無神論者が世界二位であるというニュースを見て「やっぱり母国だなあ」と変に納得したばかりだけれど、関係ない。百円ショップや某ドン・キホーテなど、開店していない店も多い時間帯の中、神様、よくぞここに腕時計を置いてくださいました。そして無数の選択肢が散らばる中、「駅の売店へ行く」を選んでよかった。「体内時計で乗り切る」とか「トイレに引きこもってインターネットの海に沈む」とかに逃げなくてよかった。

しかし現在は、そんな安堵も束の間と言わざるを得ない状況となってしまうた。街をゆくサラリーマンたちがこぞって万単位の腕時計を光らせる現代において、二千二百円という金額を破格とみなすことは、時計マニア様、ひいては日本中の社会人の皆様からすれば幼稚な所業かもしれない

いが、聞いてほしい。大学生の金銭感覚は、並大抵の大人よりもずっとデリケートなものなのだ。

詳細に言おう。僕はこの春から、高校では規則で禁止されていたアルバイトを始めた。そこで気付いたのだが、自力でお給金を貰い受けるとどうしても金銭との向き合い方が変わってくる。これまでよりも自由に使えるお金は増えているはずなのに、どうにもコストパフォーマンスばかり気にしてしまう。一人暮らしをしていない僕でさえ例外ではない。

「……ぐぬぬ」

二千二百円と表記された値札を見て、ひとまず思考。買うべきか、見送るべきか。

今気付いたが、よく見るとこの時計、携帯電話やデジタルカメラで世界的に有名な電機メーカーによるものではないか。パッケージに会社のロゴが刻まれているから、間違いない。腕時計の事業からはとうに撤退していた覚えがあったが、再び着手していたとは初耳である。

「仕方ない、買おう」

背に腹は代えられぬとは、こういう時に言うのだと思う。「有名メーカー製だぞ！ わーい！」とはしゃげるほど時

計にこだわりはないし、そもそも物事に対して上手いこと喜びを見出せるほど、器用な人間でもない。

まさに苦渋の決断。僕はついに売り場から時計を取り出すと、唇を噛みしめてレジへと向かった。

そのレジにて、何とも不思議なことが起こった。商品上台に置き、予定調和の「二千二百円です」という言葉を聞いた後のことだ。店員は僕がトレーに置いた代金を受け取ると、次の瞬間、どこからか青色の変な物体を取り出して、スツと時計の横に置いた。本当に、スツと。無言である。形状が昔のSFアニメに登場しそうな光線銃のようで、かつ引き金の付いた持ち手の上部にある、体積の大きい部分——「ボディ」とでも呼べばよいだろうか——に巨大な星のマークが描かれている点だが、以前は僕も遊んでいたかもしれない児童向けの玩具を想起させる。まず言えるのは、これが時計とは何ら関係のない変な物体だということだ。

「えつと……あの」

「はい？」

困惑する僕をよそに、店員の若い男はいかにも店員らしい、生き生きとした笑顔をこちらに向けてくる。

それがやけに感じの良い表情であったので、僕は一瞬、

何事もなかったかのようにこの状況をスルーしそうになった。しかし慌てて首を振り、目の前のブツを勢いよく指さしてみせた。

「いや、これ、何ですか」

「オマケくんです」

「おまけくん？」

「ええ。ぜひ、受け取ってください」

これは半ば、いや、かなりの押し付け。僕が把握していなかっただけで、いくら以上のお買い上げで光線銃をプレゼント、という奇妙なキャンペーンが催されていたのだろうか。しかし、それも色々と不自然ではないだろうか。

頭の中が、ぐるぐる、ぐるぐる。すると店員の男が、穏やかに微笑みながら一言、口にした。

「よい休息を」

ホームに降りる。まだ電車が来る気配はなく、僕は母お手製の黒マフラーと黒手袋を着用し、待ち時間を乗り切ることにした。

この時期の朝はとにかく寒い。それは防寒着を身にまとっても正直さほど変わらないけれど、何かに頼って現状を誤魔化すことは、生きるうえで重宝するべきテクニクである。それを巷では「ポジティブ思考」と呼ぶらしいが、いささか言葉に花を持たせすぎではなからうか。辛い現実から目を背けることをポジティブというのなら、後悔するところがあっても行動を改善せず、さらに後悔を重ねていくような奴も明るくて元気な人間になってしまふ。

しかし、目を背ける必要が元々ない、捨てたものではない現実も今の僕には少なからずあった。現在の時刻は六時二十五分。乗り換えのための空き時間が十分以上と長かったため、売店まで足を運び、時計をかうかどうか散々迷ってもなお、ちょうど予定通りの時刻に電車へと乗れそうな状態まで事が進んでいる。

ズボンのポケットに忍ばせているこの時計。確かに予想外かつ重い出費ではあったけれど、こいつはそのぶん僕の救世主になってくれたのかもしれない。ありがとう、二千二百円の時計くん。心の整理もようやくついてきたし、ひとまず君に礼を言いたい。

「ありがとう、時計くん！ 二千二百円もあればラミーの

高級ボールペンが余裕で買ったけれど、ありがとう！ それに百均にはなんと五百円の時計が売っているけれど、それでもありがとう！」

未練たらたら、全く心の整理ができていなかった感謝を述べていると、時間は刻一刻と過ぎていった。十分、いや十五分。もしかしたら二十分くらい経ったかもしれない。とにかく長い静寂に、僕の声だけが響き渡っていく。

「……………」

え？ 二十分？

何かが、おかしい。訳の分からないことをこんなに長いこと叫んでいるのに、僕のことを通報する噂好きの奥様方や、それに伴って僕を捕らえに来る駅員さんの姿が見当たらない。それどころか、周りからの視線を一切感じない。

よく見ると、反対側のホームも含め、この駅には自分以外の人間が誰一人としていなかった。空はまだ暗いが、本当に二十分も経過していたとすれば、そろそろ通勤や通学をする人々が辺りが混み始める頃のはずである。

そして、無視できない事実がもうひとつ。

来ないのだ。遅延の知らせもない中、時は止まることなく進んでいるはずなのに。最重要事項である電車が一向に

来ない。

「こんにちは！」

ふと、声が出た。ハイトーンで邪気のない、ちいさな男の子の声。無機質な静寂の中、その声はあまりにも鮮明に脳へと流れてきて、驚いた僕はまるで脊髄反射のように辺りをキョロキョロし始めた。

「こつち！ こつちだつてば！」

「……………」

「よく見て！ ほら、きみの手首のところ！」

手首。言われるがまま右手の甲付近の手首を見てみると、なんとジャケットの袖に一粒の毛玉が！ たぶんこれではないだろうと思いつながら、今度は反対側、すなわち左手首へと視線を移す。

左。左とは、すなわち北に向いたとき西にあたる方であり、東に向いたとき北にあたる方である。そして辞書において、しばしば「食事の際に茶碗を持つ側」などと書き表されてきた。最近の世の中は多様性を重視する傾向にあるから、左利きの方々の存在を考慮しないこの表現はこの先、高い確率で淘汰される気がするけれど、それでもある程度の人々を納得させた説明には違いない。

念のため付け加えておくと、これは僕のような右利きの人間にとっては、茶碗を例にせずとも成立する万能な解説である。スマホを握る方とか、ひげを剃る際に手鏡を持つ方とか。あるいは時計を腕に巻く方だとか――。

「あれ」

時計。二千二百円の、時計くん。

左手首に見えたヤツを前に、思わず硬直する。先程までポケットの中にあっただけだけれど、僕はこれを一体いつ腕に巻いただろうか？

「やっと見つけてくれたね！ ボクが、二千二百円の時計くんだよ！」